



演奏付きで、16ミリ映画フィルム3作品を上映した。ボーンデジタルの映像作品が大部分を占める21世紀において、本事業が目指すのはこうした生のパフォーマンスを肌感覚で味わっていただくこと

であり、今年度はコロナ渦中のデジタル時代における無声映画文化の力強さを明示できた。

■参加者の声

「活弁というものに初めて触れた。生演奏もあり、とても楽しめた」「ソーシャルディスタンスなどコロナ対策も十分で安心して参加できた。貴重な時間だった。無声映画は生演奏と共に本当に楽しめた」「無声映画は生で体感を是非まだ体験した事の無い人、年代の方にも観て欲しい」

■新聞記事など掲載

・高田馬場経済新聞 <https://takadanobaba.keizai.biz/headline/527/>



(2) 映像文化を通じた性的マイノリティの可視化促進事業

①ゲストトーク付上映会イベント「誰のためにつくるのか～『虹色の朝が来るまで』上映会」の実施

ろう者で性的マイノリティの当事者でもある映画監督・今井ミカ氏を招聘し、ろう者のLGBTコミュニティを描く映画を上映した。監督とのトークセッションでは、作品の制作過程に関するインタビューを通じて現代日本における、ろう者の性的マイノリティが置かれた状況について来場者が学ぶ機会を提供することができた。

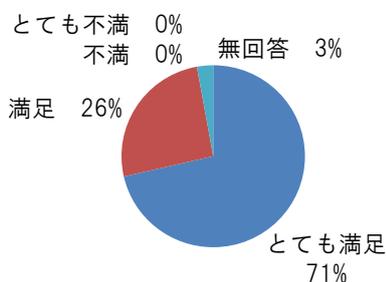
■参加者の声

「LGBTだけでなく、ろうの世界も知れてトークでも勉強できて良かった」「性的マイノリティの人々への理解だけでなく考えさせられる作品」「LGBTQという現代社会における理解について、よく描かれていた。当事者の気持ちが伝わり、葛藤の中でどう生きるか、人権の尊重を改めて考えさせられた」

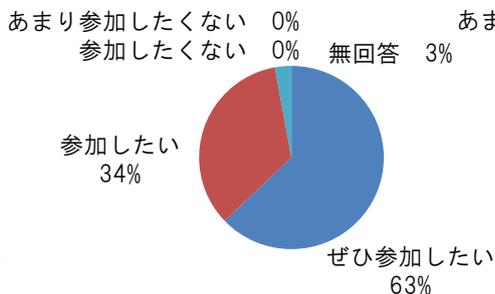


イベント参加者を対象としたアンケート結果

イベント参加者の満足度



今後、鑑賞をはじめとする文化活動しようと思う人の割合



イベント参加者の理解度

